創生ジャーナル Human & Society, 2022, 4, 78-91

《論文》

専門職者にとっての生涯キャリアヒストリー法

—名称変更の経緯と背景、および省察ツールの機能と可能性—

渡邊　洋子（新潟大学）・犬塚　典子（田園調布学園大学）・
種村　文孝（京都大学医学教育・国際化推進センター）・柏木　睦月（東京大学大学院博士課程）

現代の専門職者は、従来からの専門職と専門職性をめぐる状況に加え、Covid-19 によるパンデミックの影響下で中長期的なキャリアの見通しが持ち難い中、現場の直近の課題に向かい合っている。筆者らの共同研究ではこれまで、専門職者のキャリアの軌跡とその振り返りをめぐる新たな研究・実践方法論として、主にライフラインチャートを用いた「キャリアヒストリー法」を提起してきた。本稿では、2022 年 1 月以降の同法の「生涯キャリアヒストリー法」への名称変更の背景と経緯を跡づけた後、生涯キャリアヒストリー法における省察と省察的思考の位置づけを成人教育学的視点から検討し、さらに実践場面での「ライフラインチャート」の「省察ツール」としての機能と省察プロセス、そこでの学習支援者の役割を考察する。

キーワード：専門職、生涯キャリアヒストリー法、省察ツール、ライフラインチャート

はじめに

現代の専門職[1]の多くは、21 世紀の複雑化・高度化・多様化する専門職世界の潮流の中、パンデミックで先の見通しが効きにくく中長期的な視野を持ちにくい新たな局面において、現場の直近の課題に向かい合っている。本研究は、このような専門職者が自らのキャリアへの省察的思考を深めるために、「生涯」という時間軸において取り組むアプローチの方法論を、省察ツールの観点から吟味・検討しようとするものである。

筆者らの共同研究ではこれまで、専門職者のキャリアの軌跡とその振り返りをめぐる新たな研究・実践方法論として、主にライフラインチャートを用いた「キャリアヒストリー法」を提起してきた。2022 年 1 月からこれを「生涯キャリアヒストリー法」と名称変更するにあたり、本稿では、その背景と経緯を明らかにするとともに、その省察的意義を特徴づける「省察ツール」としての「ライフラインチャート」の機能、およびその省察的思考への支援可能性を検討したい。

以下、１で「キャリアヒストリー法」から「生涯キャリアヒストリー法」への名称変更の背景と経緯を跡づけ、２で「ライフラインチャート」の「省察ツール」としての機能とそこで想定される省察プロセス、および支援者の役割を概観し、３で「生涯キャリアヒストリー法」における省察的思考が、パンデミック後の医療人キャリア教育と専門職者のキャリアデザインにどのような示唆と貢献をもたらすかを検討する。

1. 「キャリアヒストリー法」から「生涯キャリアヒストリー法」へ

「生涯キャリアヒストリー法」とは、職業人・社会人が、自らの働き方・生き方を含むキャリアを、生涯継続的な視野から捉え直す、省察的思考による省察の手だてを指している。生涯継続的な視野とは、キャリアとライフの生涯継続性と相互連関に注目するという意味である。そして、そこで重要なのは、そのキャリアとライフが「過去—現在—未来」の時間軸において可視化され、当事者の手により客観視されるという点である。

筆者らがこれまで取り組んできた「キャリアヒストリー法」の「生涯キャリアヒストリー法」への名称変更に至る経緯と今後の課題を、これまでの研究経緯から跡づけておきたい。

[1] 本研究における専門職は、医師や法曹のような古典的専門職に留まらず、職務の遂行にあたり、一定の知識やスキル、専門性獲得のために一定期間以上の研修・訓練期間を要する職業を総称するものである。本稿では、ジェンダー視点から見て、専門職の直面するキャリア上の課題が顕著に見出される職種として医師に注目する。この点については、渡邊洋子「専門職のキャリアをめぐる現代的課題—女性医師を手がかりとして」『京都大学生涯教育フィールド研究』第4号、2016、3-16 頁などを参照。

(1)「キャリアヒストリー法」構築への取り組み

一般に「キャリアヒストリー」という用語は、職業生活や職業人生（work）の経緯を指し、キャリア形成やキャリアアップのプロセス、職業遂行上の課題や困難、職業人としてのサクセスストーリーや苦労話などをまとめたものを指す場合が少なくない[2]。従来、キャリアの軌跡を取り上げる場合には概して、ライフはキャリアとは差し当たり無縁の要素とみなされる傾向にあり、そこには、当事者の生活や生き方、人生観など「ライフ（life）」に相当する部分は、副次的にしか登場しなかった。唯一例外的なのは、それがキャリア形成・キャリアアップの「障害」になった場合、ライフイベントなどが間接的にキャリアに影響を与えたことが明白な場合、などである。この意味で、キャリアとライフは、利害の反する一種の対立構図の中に位置づけられてきたとも言える[3]。

これに対し、女性医療専門職（女性医師・女性看護師）を主対象として出発した筆者らの共同研究[4]では、自らの働き方・生き方を含むキャリアの研究法／実践法として「キャリアヒストリー法」の開発研究に取り組んできた[5]。本研究では、個人が、自らの働き方・生き方を含むキャリアを生涯的視野から「過去―現在―未来」という時間軸で捉え直そうとする場合、その結果として生み出されたキャリアの系譜を、キャリアヒストリーと呼ぶ。

このキャリアヒストリーは、個人が、自らのキャリアとしてたどってきた軌跡を何らかの手だてを用いて言語化、ないし視覚化することによって生成される。キャリアヒストリー生成の取り組みは「働く当事者」が自身の文脈に即してキャリアを具体的に捉え、その歩みを時間軸において振り返る手立てである。すなわち、「働く当事者」が自身のキャリアを振り返ることを通して、その当事者が、①これまでどんな経緯をたどり、そのキャリアがいかに変遷してきたか、②そのプロセスの中にどんな事柄やできごと、契機があったか、③そこにどんな価値観（信念）や諸要因、こだわりなどが見いだされるか、などの確認・検討が可能になる。それを通して当事者が、④自分が今どこにいるのか、なぜここにいるのか、⑤これからどこに向かって行きたいのか、を考えられることを重視する。このプロセスを通して「働く当事者」には、自らの立ち位置と職業意識、さらにその根底にある職業人としてのアイデンティティを内省的に確認・再吟味し、自らのキャリア＝ライフの生涯設計を改めて位置づけなおした上で、「今後」のキャリアを再構想する機会と手がかりを得ることが、可能になると思われる。

以上のように、キャリアヒストリー法は、専門職の生涯的視点に立ったキャリア（生涯キャリア）を、仕事（ワーク work）以外の諸要素（ライフ life）と切り離すことなくトータルに捉えることを前提とする。「生涯キャリア」とはすなわち、専門職者が生涯継続的な視野で専門職としての自覚や意識（プロフェッショナリズム）を培うと同時に、生涯的視点からキャリア設計や人生・生活設計への視座や展望を獲得し、その実現への具体的道筋を描けるようになることを目指すものである[6]。そこで顕在化され、抽出された個々人のキャリアヒストリーは、専門職者の生涯キャリアを、働く当事者自身の文脈に即して具体的に捉える手だてとなる[7]。

すなわち、筆者らが提起してきたキャリアヒストリー法とは、働く当事者が、自らのキャリアヒストリーをワークシートなどのフォーマットに視覚的に描き出した上で、それを見ながら単独で語り、ないし小集団で話し合う中で、自らのキャリアの「過去―現在―未

---

[2]例えば、ウェブサイト「日経 Woman」では「さまざまな分野で活動している女性」の「ヒストリー」、すなわち「失敗して落ち込んだ過去、そしてそれを乗り越え、新しい 1 歩を踏み出す…。そんな女性たちの物語」（「インタビュー記事」）を「あの人のキャリアヒストリー」（2020 年 9 月 21 日付）と命名している。(https://doors.nikkei.com/atcl/column/19/071600205/091700010/)。

[3] 背景として、ジェンダーギャップ指数（2021 年 120 位）など性別役割分業観が未だ根強い日本社会では、職業世界が未だに男性優位社会の側面を色濃く有することも反映していると思われる。

[4] 生涯キャリアヒストリー研究会（2021 年末より改称、旧キャリアヒストリー研究会。メンバー：渡邊洋子、大塚典子、池田雅則、種村文孝、池田法子、柏木睦月）。なお、本研究会は次の科学研究費の助成を受けている。基盤（B）「女性医療専門職における生涯継続教育の方法論開発―キャリアヒストリー法の構築と活用」（2016-18、課題番号 16H03763、代表者：渡邊洋子）および同「女性医療専門職におけるキャリアヒストリー理論の実践的構築および適用に関する研究（2019-21、課題番号 19H01625、同前）。

[5] 渡邊洋子「キャリアヒストリー法の構築に向けて―女性医師を対象として」『創生ジャーナル Human and Society』第 1 巻, 2018, 65-74 頁、種村文孝・大塚典子・池田雅則・池田法子・渡邊洋子「ライフラインチャート活用の到達点と課題―女性医療専門職のキャリア研究方法として」『創生ジャーナル Human and Society』第 2 巻, 2019, 118-129 頁、『女性医療専門職における生涯継続教育の方法論開発―キャリアヒストリー法の構築と活用』（科学研究費補助金研究成果最終報告書、代表者：渡邊洋子、新潟大学）、池田雅則・池田法子・種村文孝・大塚典子・柏木睦月・渡邊洋子「キャリアヒストリー法の構築―看護職のためのヒアリングシートの開発」『看護研究』No. 4、医学書院、Jul.-Aug. 2021、352 - 367 頁。

[6] 渡邊「専門職のキャリアをめぐる現代的課題―女性医師を手がかりとして」参照。

[7] 種村他「ライフラインチャート活用の到達点と課題―女性医療専門職のキャリア研究方法として」参照。

来」の時間軸とそれをめぐる価値観を浮き彫りにし、そのプロセスの中から生涯キャリアの展望を生み出していくプロセスを、研究・実践のメソッドとしてまとめたものである。

2021 年 7 月、筆者らは、以上のような共同研究の成果を、雑誌『看護研究』掲載の「キャリアヒストリー法の構築―看護職のためのヒアリングシート開発」[8]において、看護職の文脈に特化しつつ一本の論文にまとめた。そこでは、特に医療専門職のキャリアの軌跡と振り返りをめぐる新たな研究／実践方法論としてのキャリアヒストリー法の研究開発プロセスを可視化するとともに、この実践メソッドを他領域の専門職へと展開する可能性をも描き出そうと努めた。キャリアヒストリー法は、医療専門職への注目から出発しながらも、生涯キャリアの枠組みが適用される他のあらゆる専門職に、広く適用可能であると筆者たちは捉えてきたのである[9]。

(2)「生涯キャリアヒストリー法」への名称変更

他方で筆者らは、キャリアヒストリー法のモニターセッション[10]を重ねて研究開発を進める中、「キャリアヒストリー法」という呼称が、本共同研究で開発した独自の実践メソッドを指す名称として不十分なことを徐々に認識するようになった。『看護研究』刊行直後に第 53 回日本医学教育学会研究大会で実施したワークショップ「キャリアヒストリーで仕事（work）と人生（life）を振り返る」を大きな契機として、今般のパンデミックが医療者の生涯キャリアに及ぼした影響が、外部者の想定をはるかに上まわることを実感として受け止めた。それを受けて呼称に関わる集中的な協議を行い、2022 年 1 月から「生涯キャリアヒストリー法」へと名称変更することとした。

その背景と理由は、以下の通りである。

第一に、「キャリアヒストリー法」自体の用語としての趣旨の伝わりにくさと紛らわしさがある。前述のように、筆者らの実践メソッドは、職業人生の変遷のみを把握する「キャリアヒストリー」とは一線を画し、自らの働き方・生き方を含むキャリアを生涯的視野から時間軸で捉え直そうとするものである。だが、「キャリアヒストリー法」の呼称では、差別化ができず、独自性を明確に示し得ない。対外的に本メソッドを発表・紹介する機会が増える度に、この問題が顕在化してきた。また英訳においても「キャリアヒストリー法」Career History Method では、単に職業人生の変遷（‘career history’）を記述する（聴き取る）一般的な方法との差別化は困難であった。このような名称の紛らわしさから、学会発表時に類似したキャリアメソッドやツールとの相違を問われることもあった。

第二に、2019 年以降のパンデミックに起因して、キャリアヒストリーにおける「ライフ」の位置づけをより明確化する必要性が生まれ、さらに重要性を増したということがある。本共同研究では、特に女性医師・女性看護師などに顕著に見いだされるキャリア継続やキャリア設計・キャリア開発の諸課題の問題に注目してきた。パンデミック直前でもこれらに解決の見通しが生まれていたとは言い難いが、働く当事者においてはもはや、パンデミック前に見出してきた諸課題とは次元の異なる、より深刻な課題に直面していると言わざるを得ない。

次々と変異株が生まれ、感染状況が変化する中、目の前の業務に追われる医療者の多くは心身の消耗と極度のストレスを抱える状況にあり、「燃え尽き症候群」をはじめとする職業意欲やキャリア継続意識の喪失・減退など、ワークとライフをめぐる重大かつ切実な事態が見い出される。職場における継続的な過重労働による心身の疲弊、感染リスク・差別などによる強度のストレスに加え、コロナ禍独特のリスクが、その生活の場の安定や安心安全、家族の健康安寧や子どもの保育・教育、近隣の人間関係に至るまでに、幅広く根強い影響を及ぼしている。

その中で筆者らは、ワークとライフをめぐる 2 つの視点がより重要になることを、実感として受け止めた。1 つ目の視点は、働く当事者のキャリアは、ワークを取り巻くライフ、およびライフの多様性とそこに含まれる広範な諸要素を考慮し、ワークとライフの相互性や連関、両者の調和を見据えながら捉える必要があるということ、すなわち LIFEWIDE の視点を持つことである。2 つ目の視点は、パンデミックで現在の自身の立ち位置を見失いがちになり先行きが見通しにくい中でも、敢えて自らの時間軸を確認・設定し、あるいは

[8] 池田雅則・池田法子・種村文孝・大塚典子・柏木睦月・渡邊洋子「キャリアヒストリー法の構築―看護職のためのヒアリングシートの開発」『看護研究』No. 4、医学書院、Jul.-Aug. 2021、352 - 367 頁。

[9]同前。

[10]研究協力者に向けてワークシートを用いたセッションを実施し、そのプロセスの実体験を通して、実践方法論をブラッシュアップするという取り組み。具体的には、池田他「キャリアヒストリー法の構築―看護職のためのヒアリングシートの開発」361 - 3 頁を参照。

それを取り戻そうとしながら考える必要があること、すなわち LIFELONG の視点である。筆者らは、この LIFEWIDE と LIFELONG の交差する地点に明確に生涯キャリアを位置づける必要があることと認識し、「生涯」を前面に付した「生涯キャリアヒストリー法」の名称を考案した次第である。

第三に、生涯キャリアへのパンデミックの影響は一過性ではない上に、広範な専門職領域に多大な影響を及ぼしていることである。特に医療・介護・教育・保育などのように、対面的接触を前提とする対人専門職では、対人を基本とするがゆえに、対人接触自体が最大のリスクとなる。全社会的急務である感染症予防の中核が対人接触の制限・抑制にあるがゆえに、日々の業務や働き方に加え、個人・家庭生活や身近な人間関係などが、直接的・間接的な影響を受けやすい。それが中長期的なキャリア設計や生活設計にも、メンタルヘルス、モチベーションや働きがい、キャリア観やキャリアの生涯的な見通しに多大な影響を及ぼし得る。パンデミック前に培った経験や仕事のしかたが通用しない不安、個々の場面で「何が正解か」の判断の不確実さ、「いつ収束するのか」の見通しの不透明さなどが生涯的視野を妨げがちである。またより広範な専門職に共通に見い出される課題、例えば、女性・男性の在宅ワーク、学校・保育施設や学童保育などの閉鎖、職場や家庭でのストレスの増加など、従来のワークの視点で捉えきれない問題が次々と生じている。

専門職者には、このような不確実さや不透明さの中にいても常に、目前の事態への対処のみに目を奪われることなく、自身の立ち位置を確認しつつ、現場の状況を見据えることが切に求められる。さらに、中長期的とまでいかなくとも、当面のワークやライフへの見通しをもって日々の業務に取り組むことが、職務遂行上も重要になると思われる。そのためにも、何らかの形で、日常性から少し離れたところで「過去ー現在ー未来」の時間軸を見出し／取り戻し／軌道修正し、ワークとライフに関わる自らの価値観や信念、不確実な時代を歩むための指標や指針などを見出す機会が、より重要なものとなるだろう。「生涯キャリアヒストリー法」の名称が、生涯キャリアへのこのような新たな認識を共有し得るきっかけとして機能することを期待するものである。

以上の 3 つの背景と理由を踏まえ、働く当事者自身が、自らのキャリアの中核に「過去―現在―未来」の時間軸を明確に顕在化させ、その時間軸の中で自らのワークとライフをトータルに、そして意識的・俯瞰的に捉え直す営みとして、改めて「生涯キャリアヒストリー法」を再定位したい。同法は、生涯的視野と省察的思考に基づくキャリアヒストリー生成の支援メソッドであり、特に専門職の自己省察と自己開発に汎用的に適用されることを目指すものである。なお、筆者らがこれまでの共同研究において「キャリアヒストリー法」を掲げて取り組んできた調査研究の成果はすべて、「生涯キャリアヒストリー法」の趣旨の下に行われたものとする。

(3)「生涯キャリアヒストリー法」の英訳の検討

「キャリアヒストリー法」から「生涯キャリアヒストリー法」に名称変更するにあたって、英語名に関しても協議を重ねた。議論の経緯として、次の点を明確化しておきたい。

筆者らは、これまでの呼称に「生涯」を加筆することで「生涯学習（lifelong and lifewide learning）の視座に立つことを明確にしようと考えた。新たな協議の上、この視座を明示し、方法論としての特徴を盛り込んだ英語名として、‘Methods of career history reflection and analysis from the perspective of lifelong and life-wide learning’を使用することとした。ここで特筆したいのは、「生涯キャリアヒストリー法」の「法」（＝メソッド）には、実践・支援方法を意味する「省察法（reflection）」とアカデミックな研究方法を意味する「分析法（analysis）」の二つが含まれている点である。すなわち上掲の英語名は、このメソッドが両者を兼ね備えることを明示するものである。

・生涯キャリアヒストリー**省察法**‘Methods of career history **reflection** from the perspective of lifelong and life-wide learning’

・生涯キャリアヒストリー**研究法**‘Methods of career history **analysis** from the perspective of lifelong and life-wide learning’

なお、英訳において単数の‘Method’ではなく、‘Methods’と表記しているのは、これまで筆者らが主にライフライン法を中心に取り組んできた「キャリアヒストリーチャート」に留まらず、今後、同様の趣旨に立つメソッドを研究開発していく潜在的可能性をも含みこんでいるためである。

２．省察ツールとしての「キャリアヒストリーチャート」

（1）省察概念の検討、および省察ツールの位置づけ

生涯キャリアヒストリー法は、自らのキャリア＝ライフを時間軸において振り返る、という省察（reflection）ないし省察的思考（reflective thinking）の生成を支援する実践メソッドである。ここでは、成人教育学分野において「省察」を主要概念と捉えた 3 人の論者（Dewey、Mezirow、Schön）の議論を取り上げ、各々の省察概念を手がかりに、生涯キャリアヒストリー法における省察についての試論を行うとともに、省察ツールの位置づけを明確化する。

①　John Dewey

「省察的思考」の定義は、日本の戦後教育にも大きな影響を及ぼした教育学者・哲学者 John Dewey の著書 *How We Think*（1910）に見いだされる。同書で「省察的思考」は「信念（beliefs）や内在する知の形態（supposed form of knowledge）を、それを支える根拠やそれが導くさらなる結論に照らして、能動的、持続的かつ注意深く考察することによって構成される」[11]ものとされる。Dewey は思考を、①何かが頭に浮かぶ、頭をよぎる、意識するなどの段階、②五感で直接に確認できないような段階、③何らかの証拠や証言に基づく信念に関わる段階、の 3 タイプに分け、③のみが教育的価値を有する「省察的思考」だとした。すなわち「省察的思考」とは「ある信念の根拠や基盤を意図的に探し、その信念を支える妥当性を検討する」（下線引用者）プロセスを指す[12]。

この Dewey の定義を「生涯キャリアヒストリー法」の文脈で捉え直してみよう。「ある信念」とは、当事者の働き方や生き方の底流にある、職業的アイデンティティやキャリアデザイン、社会活動、個人生活や家族・周辺の人たちとの関係性をも含む、中長期的かつトータルな人生設計に相当するものと考えられる。信念の「根拠」とは、そこに至る生育環境やライフイベント、それらの中でどのように自己形成してきたか、の経緯に相当すると思われる。また信念の「基盤」とは、広い意味での価値観（職業観や人生観、人間観）や思い、こだわりなどの総体とみることもできよう。

以上から、「生涯キャリアヒストリー法」に向き合う当事者にとって「過去を振り返る」「将来を見通す」営みとは、「現在の自分」がどのような「信念」をいかに培ってきたのかを明確化し、その「妥当性」を検討するためのリソースの獲得を可能にする取り組みと言えよう。そのリソースの獲得プロセスを意図的に生み出し、方向づけるためのツールを、本研究では省察ツールと呼ぶこととする。

②　Jack Mezirow

コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ名誉教授の Jack　Mezirow は、変容的学習（transformative learning）理論の提起で広く知られるが、そこでの省察は、成人性と深く結びついたものである。Mezirow は、子ども期の形成的学習（formative learning）が成人期には「変容的学習」へと変化する、との見解に立ち、「人びとは、これまでの知識獲得の方法に磨きをかけることで変化する状況に適応しようとするよりは、むしろ、変化するできごとをより完全に理解し、自分の生活に対する自らのコントロールの度合いを高めるために、新たな思考の枠組みを手に入れねばならない」と考えるようになる」[13]と考察する。

この考え方を生涯キャリアヒストリー法の文脈で捉えると、当事者は、目の前で日々変化する現場の専門職的状況をより正確に理解するとともに、自らのキャリア＝ライフへの自身の主導権を強化したい（ないし取り戻したい）との動機から、自らの仕事や生活への新たな方針や指針の獲得を期待して、ワークショップやセッションに能動的に参加する。このような成人学習では「伝達されてきた考え、あるいは過去の学習した事柄の背後にある前提について、その正当性を示し、妥当性を確認するというプロセス」、すなわち省察が「決定的に重要な側面」とみなされる。

Mezirow は、Dewey を起点に成人教育研究者（Knowles、Gagné、Kolb 等）の経験的学習理論を検討し、合理的な問題解決に向けた「問題の内容や説明」の省察には Dewey の考えが「的確」とする一方、省察自体については次のように述べる。

---

[11] John Dewey, *How We Think*, C. HEATH & CO., PUBLISHERS, 1910, pp.6. なお、同書は 1933 年に Regnery から改訂版が出ており、日本では 1950 年に植田清次訳『思考の方法』（春秋社）が出版されている。

[12] Ibid.,とはいえ、デューイは思考は①～③のどこから始まるものであってもこの省察のプロセスを目指すものとなり、このプロセスにこそ、教育的価値が見いだされることをと強調している。

[13] Jack Mezirow, *Transformative Dimensions of Adult Learning*, Jossey-Bass, 1991.（ジャック・メジロー（金澤睦・三輪建二監訳）『おとなの学びと変容―変容的学習とは何か』、鳳書房、2012、5 頁。

しかしながら、私たちは問題解決をめぐる戦略や手順についても省察し、ときには行動中や行動のあとでも、自分たちの決断を確認することである。これは、自分たちがこれからおこなうことやすでにおこなったことについて「立ち止まって考える」ことである。問題解決を試みるにつれて私たちはさらに、現在経験しつつあることがらと、以前に学んだことがらについて類似点や相違点を探究しようと省察する。（下線は引用者）[14]。

下線部のように、Mezirow は省察を「自分たちがこれからおこなうこと」（未来）や「すでにおこなったこと」（過去）について「立ち止まって考える」（現在）ことと捉えている。すなわち、省察のプロセスにおいて「過去―現在―未来」をつなぐ時間軸の存在が浮き彫りになることが示唆される。「立ち止まって考える」中で、「現在経験しつつあることがら」と「以前に学んだことがら」を照らし合わせ／突き合わせながら「類似点や相違点を探究」することが重視される。すなわち、この省察は、かなり単純化された形ながら、「現在１→過去→現在２→未来→現在３」のように、時間軸を往還しつつ進むと考えられる。「現在１」から過去に戻ると、過去から戻ってきた「現在２」はすでに過去となった「現在１」とは異なる要素や局面を有する、のようにである。

Mezirow はさらに「省察とは、経験の意味づけを解釈し、意味づけをおこなう努力の内容とプロセスを、また努力の想定を批判的に評価するプロセスである」[15]と述べる。「自分の経験を理解したいと求めるのは、おそらく私たちのもっとも人間らしい特徴である」との認識により、効果的に行動するためにはまず、「自分の経験とは何かを理解＜しなければならない＞」とする。そこでの「意味」は、次のような学習概念に裏付けられている。

学習とは、私たちがすでに生成した意味を、現在経験していることについて私たちが考え、行動し、感じる仕方を導くために用いることを意味する。意味づけることとは、自分の経験の意味を理解したり、経験にまとまりを与える行為である。＜意味とは解釈なのである＞[16]。

すなわち、Mezirow において「経験の意味づけ」とは、「このような解釈を行う際に必要となる特定の知識、信念、価値判断、感情」[17]の妥当性を検討することによって、「知覚や認知の作用を律する規則のシステム」[18]を再編する可能性を探ることとも言えよう。Mezirow は「意味を生成することは経験を把握し、経験に一貫性を与えることである」[19]（下線引用者）とも述べている。私たちは知覚と認知の両方を用いながら解釈するのであり、この意味の生成は意図的である場合もない場合もあるとされる。

その上で Mezirow は、省察には＜内容の省察＞＜プロセスの省察＞＜問題の想定の省察＞の三つがあるとする。＜内容の省察＞は、明示的な具体的事実を意識的に捉えることを指すものと思われる。＜プロセスの省察＞には、「自分がどのように理解し、思考し、判断し、感じ、行動しているのかをめぐって省察すること、および批判することの両方が含まれている」[20]。さらに、＜想定の省察＞には「＜なぜ＞そのように認識し、考え、感じ、行動をとったのかについて気づくことが含まれる」[21]とされる。Mezirow は、3 つの省察をともなう可能性のあるものを「遡及活動的な省察」と呼んでいる[22]。遡及とは過去のある時点までさかのぼることを意味する。「生涯キャリアヒストリー法」に内包される省察は、この「遡及活動的な省察」に最も近いと想定される。このような省察の連続性ないし断続性を生み出すべく道筋を用意し保障するものを、省察ツールと位置づけたい。

③　Donald Schön

Donald Schön はマサチューセッツ工科大学（MIT）教授であり、「省察的実践」をキーワードに組織学習と専門職の現職教育に取り組んできている。Schön によれば、省察は、自分の過去の行為について批判的な考察を加える「反省」とも、過去への指向性が残る「振り返り」とも異なり、深く自己を顧みることを意味するものである。だが、自己の内面を見つめることのみが重視されがちな「内省」とは異なる概念とみなされ

[14] 『おとなの学びと変容―変容的学習とは何か』、146 頁。
[15] 同前書、145 頁。
[16] 同、16 頁。
[17] メジローはこれを、意味スキームと呼ぶ。同、9 頁。
[18] メジローはこれを、意味パースペクティブと呼ぶ。同前。
[19] 同前書、46 頁。
[20] 同、148 頁。
[21] 同、150 頁。
[22] 同、151 - 152 頁。

ている[23]。Schönによれば、専門職者の省察には2種類ある。「行為についての省察」reflection-on-actionは、実践を行った後に、記録などを手がかりにその実践を対象化し、実践の意味を考える営みを指す。他方「行為の中の省察」reflection-in-action は、実践者が実践の最中に、それまで経験したことのない状況に出会った際、その場に対応するために行うものである。具体的には、枠組を転換し、新たな問題を設定し、問題の解決に向けた戦略をたてていくといった営みを指す[24]。後者は、多様な実践者たちに共通する「不確かで不安定で独自な状況を取り扱う時に用いる専門的技法に満ちた探究」に注目するものであることから「状況との省察的対話」[25]とも呼ばれる。Schönは、プロフェッショナル・スクールをはじめとする様々な現場の実践において、専門職の「状況との省察的対話」を詳細に検討している[26]。Schön の議論を生涯キャリアヒストリー法の文脈において捉え直すと、自らの「これまで」のキャリア＝ライフを遡って跡づけながらその「意味を考える」点では、「行為についての省察」に相当しよう。とはいえ、本メソッドは単に「過去に遡る」だけでなく、現在―過去の間、現在―未来の間、さらに過去―未来の間と、時間軸上を何度も往還しながら、自らのキャリア＝ライフを省察する営みとも捉えられる。この意味では、生涯キャリアヒストリー法は、「自らのキャリア＝ライフをめぐる状況との（時間軸を往還しながらの）省察的対話」による探究活動とも捉えられるであろう。省察ツールは、自らのキャリア＝ライフの意味を考えるための手だてでもあり、省察的対話という探究活動を円滑に始めるための装置でもある。

（2）人生を見通す省察ツール―「キャリアヒストリーチャート」

① ライフキャリア・レインボーと生涯キャリアヒストリー法

米国の教育学者 Donald E. Super は 1950 年代に、ライフキャリア・レインボーA Life-Career Rainbow 理論を提起した。Super はキャリアを「一人の人間が生涯に果たす役割（life roles）の組み合わせと順序」と捉え、大半の人が一度は経験するとみなされる 9 つの役割（子ども、生徒・学生、余暇人、市民、労働者、配偶者、主婦、親、年金生活者）に注目した。そして多次元的なキャリア、各役割への時間的関与、感情的コミットメントを概念化する手段として、ライフキャリア・レインボーの概念図（キャリアを構成する役割を虹の形で重層的に示したもの）を作成し、様々な役割における自己実現、役割の葛藤、役割選択と役割遂行の決定要因を考察した[27]。筆者らがこれまでライフライン法を基盤に構築してきたに生涯キャリアヒストリー法、およびその省察ツールとしての「キャリアヒストリーチャート」は、このライフキャリア・レインボーの包括的トラックを基盤として、個人のキャリアにアプローチするものである[28]。

この生涯キャリアヒストリー法の実践は、働く当事者に、自らのキャリア＝ライフについての省察（reflection）の機会を提供するものと位置づけられる。では、実際の実践場面においてこのキャリアヒストリーチャートは、キャリアへの省察的思考を生成するプロセスにおいてどのような機能を有し、どのような省察プロセスとその支援可能性を有するだろうか。

② キャリアヒストリーチャートの実際

キャリアヒストリーチャートは、ワーク＝ライフの「これまでの経緯（歩み）」を可視化・図式化して視覚的に確認するツールとして、a.キーワード記入シート、b.キーワード・マップ、c.フォーマット「これまでの私の歩み」の 3 点で構成される。これらがモニターセッション等で具体的にどのように使用されるのかは別稿で詳述した[29]ので、本節では、a.～c.がどんな趣旨で、いかなる機能と省察的プロセス（省察的学習）を生み出すのか、そこで学習支援者にどんな役割が求められるかについて、モニターセッションでの実践経験を踏まえつつ、試論を行う[30]。

---

[23] ドナルド・ショーン（柳沢昌一・三輪建二監訳）『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの 行為と思考』鳳書房、2007、p. v. 註 5。

[24] Schön, Donald A *The Reflective Practitioner : How professional Think in Action,* Basic Books、1983 。ドナルド・ショーン(佐藤学・秋田喜代美訳)『専門家の知恵―反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版、 2001, および『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考』。

[25] 『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの 行為と思考』、p. 287。

[26] ドナルド・A・ショーン『省察的実践者の教育―プロフェッショナル・スクールの実践と理論』、鳳書房、2017.

[27] Donald E, Super, A life-span, life-space approach to career development, Journal of Vocational Behavior Vol.16,Issue3, 1980, pp.282-298.

[28] 犬塚典子「人間を『子どもとしてみる』: 省察的実践を生きる」生田久美子・安村清美編『「子ども人間学」という思想と実践』北樹出版、2020 年、pp. 141-158. 』

[29] 池田他「キャリアヒストリー法の構築」を参照。

[30] この解明に実証的なエビデンスを得るには、一定数の研究協力者の貢献を得て実践的なアクションリサーチを行うことが必須であろう。だが、現

なお、筆者らはこれまで、当事者について、モニターセッションでは「研究協力者」、筆者らが企画運営したワークショップでは「参加者」との呼称を用いてきた。だが本節では、当事者がワークショップやモニターセッションで、省察ツール＝キャリアヒストリーチャートを活用した省察的学習に取り組む主体であることを鑑み、「働く当事者」の呼称を「学習者」とする。以下、流れに沿って、省察ツールの趣旨、機能と省察プロセス、学習支援者の役割を見ていく。

1） 各省察ツールの趣旨

ⅰ． キーワード記入シート

学習者が、「これまで」（過去）と「これから」（未来）について、自身の仕事や生活の中から、空欄に当てはまるキーワード等を記入するためのシートである。「これまで」については、過去を振り返って、「大きな転機となったできごと」と「長期的に影響を与えてきたこと」の 2 つの欄に、思い浮かんだ言葉やフレーズを記入する。その後、「これから」についても、「大きな転機になりそうなできごと」「長期的に影響を与えそうなできごと」を推測し、記入する（**図表１**）。

ⅱ． キーワード・マップ

ヨコ軸の両端にワークとライフを据えて、その軸の周辺に、両者に多様な形で関わる広範な人や経験、モノ、イベント、関連諸要素、およびキャリアに影響を与える社会事象、抽象的概念などの用語を、カテゴリー別に配置したキーワードの一覧表である。2019 年に筆者らが「これまでの私の歩み」作成のヒントとなる言葉を思いつく限り集めて作成した。2020 年以降、ここに新たに加わるキーワードは新型コロナ感染症というパンデミックである。これは国内だけでなく世界中の人々にとってワークとライフの「転機となる」「影響力の大きい」出来事である。専門職にとってはその専門職分野の道筋も変えていくような重大な事件であったと言えよう。**図表２**は、その「パンデミック後」のキーワード・マップである。専門職者が「過去―現在―未来」の時間軸のなかで、このような専門分野の変化をも視野に入れつつ、生涯キャリアを意識的・俯瞰的に捉えなおすニーズは著しく高まっている。

ⅲ. フォーマット「これまでの私の歩み」

ヨコ軸に左右に延びる人生の時間軸（10 歳と「現在」に点線）を、タテ軸にプラス／マイナス方向に向かう Happy 度を据えた、横長のマトリックスである。A 欄に過去の「転機となる出来事」を列挙し、B 欄に長期的に影響を与える要因を記入する。また未来についても C 欄に「大きな転機になりそうなできごと」、D 欄に「長期的に影響を与えそうなできごと」を転記（必要に応じて追記・修正）する。そして、各々の「転機」ごとに、その時点での自身の Happy 度を示す黒丸を打って線で結び、「ライフライン」を作成する（**図表３・図表４**）。さらに、学習者同士で、あるいは学習者とファシリテーターの両者で、記入したフォーマットを見ながら、各々が感じたこと・考えたこと・気づきなどを伝え合い、質疑を交えて共有する。

2） 機能と省察プロセス

a.キーワード記入シートで注目する「転機」は、キャリアの転換点（ターニングポイント）を指す。これは、William Bridges が「終焉」－「ニュートラルゾーン」－「開始」という 3 つの段階をもって提起した「トランジション」[31]と類似した概念である。他方、「長期的影響要因」は「キャリア・アンカー」（Edgar Shine）[32]に相当する。キャリア・アンカーとは、個人がキャリアを選択する際、最も重視し、これだけはどうしても犠牲にできないという価値観やこだわりを指す。キャリア・アンカーは、職業人生の拠り所となる一方、一度形成されると変化しにくく、生涯を通じて意思決定に影響を与え続けるものとされる。

ワークとライフの現在に至る歩みをいくつかの「転機」から捉える営みは、「行為についての省察」のプロセスとも言える。現在の足場から過去を想起した際に、存在感や印象が最も大きい出来事をいくつか選び取ることは、現在の自身のフレームを通して自らのヒストリーを描き出そうとする第一歩でもある。他方、現在から遡ってこれまでの人生に「長期的影響」を及ぼしてきたものを抽出する作業プロセスは「自らのキャリア＝ライフをめぐる状況との（時間軸を往還しながらの）省察的対話」、すなわち「行為の中の省察」とも言えるかもしれない。

ワークとライフの「過去」の「転機」や「長期的影

状では実践の体制も蓄積も、その検証には不十分な段階であるため、本稿では、これまでのワークショップやモニターセッションでの実践経験を踏まえて想定される、機能、省察プロセスとその支援可能性について、仮説的な見解を示すに留めたい。

[31] ウィリアム・ブリッジズ『トランジション―人生の転機を活かすために』パンローリング、2014。

[32] エドガー・H・シャイン『キャリア・アンカー―自分のほんとうの価値を発見しよう』金井壽宏訳、白桃書房、2003。

響」を探り、跡づける取り組みは、「現在」の学習者が「どのようにして現段階に至ったのか」「なぜ今ここにいるのか」を改めて確認・考察する機会となる。そこでは、記憶から遠のいていた過去の経験への新たな認識や事実の捉え直し、これまで見逃していた事項や視野に入っていても特に意識しなかった諸要素の再発見、などが起こり得る。また「未来」に向けての「転機」や「長期的影響」を推測する中で、学習者は、現在、将来に向けて抱いている希望や期待、不安や葛藤、新たな展望等を、意識化・言語化することになる。

以上を通して、学習者の「現在」の自らの立ち位置が明確化され、「今、目前の」ワークとライフにどう向き合うかを自覚的に捉える視点も生み出される。

b.のキーワード・マップは、学習者にとって非日常的な行為である、「過去を振り返る」という行為のハードルを下げる機能を有する。すなわち日々の現場での仕事や多忙な生活から一度離れる時間を得た学習者が、過去の記憶からすぐに適切なキーワードを抽出できない場合、記憶をたどる助けとなる。多様なキーワード群が、過去の経験や活動を具体的に想起しやすくし、その中から特に印象や関係の深いものを、取捨選択しようという能動的行為を引き出すものと思われる。

そこで学習者は、多様なたくさんのキーワードに触れる中で、「過去」の歩みを具体的な文脈で考えられるようになる。また、社会事象や抽象的な単語など、意識の外にあったキーワードをも自覚的に視野に入れることで、自らの経験や出来事を社会的文脈の中で捉え直すことができる。

c.フォーマット「これまでの私の歩み」では、a.で挙げた「転機となる出来事」の過去～（現在）～未来を列挙して示すことで、学習者の主観的理解による人生の略年表が生成される。学習者はこの時、ライフとキャリアの長期的プロセスを、「転機」を軸として描き出すことで、経時的な変化を視覚的に捉えることが可能になる。これは、従来の「ライフヒストリー」（裏付けのある客観的事実の提示）でもライフストーリー（本人の解釈に基づく主観的世界）でもなく、まさに生涯キャリアヒストリーの「主観的理解による人生の略年表」である。また、学習者は「長期的影響要因」の抽出により、信念や価値観の根底にある思いやこだわりに気づき、関係する諸要因を探究することが可能になる。

一方「転機」の黒丸の地点は、自身の Happy 度の直感的・主観的判定で決定される。ライフラインの形状と自身が抱いているイメージを比較検討しながら、変化を俯瞰できる。また、この直観的・主観的判定のフレームは、学習者自身の現在のワークやライフに関わる価値観や信条、やりがい、モチベーションなどによって構成されている。それゆえ、黒丸を結んだライフラインは、当事者自身が経験や出来事を内面世界で捉え返した、独自のものとなると捉えることができる。

さらに、記入後のフォーマットをめぐり、当事者同士、または当事者とファシリテーターの間で自由にやり取りがなされる。学習者は、以上の自己省察、他者とのやり取りから、自らの「現在」の立ち位置を浮き彫りにできる。この「立ち位置」とは、人生におけるワークの位置づけと意味、信念や価値観、ワークとライフの位置関係や相互関係、葛藤・課題等を指している。未来についても考えを及ぼすことで、未来への期待や不安、展望、決意等も可視化され、自覚的に捉え直すことが可能になると思われる。

③ 学習支援者の役割

最後に、ファシリテーターなど学習支援者が、学習者のキャリアヒストリーチャートへの記入に立ち会う際に、どのような役割を担うべきかを見ておきたい。学習支援者はまず、学習者が落ち着いて自らのワークとライフの記憶をたどり、跡づけ、適切なキーワードや文言を考えられる時間と空間を確保する必要がある。学習者が a.のキーワード記入シートを前にした時、学習支援者は最初、軽い質疑を行いながら、b.のキーワード・マップを用いず、自身で考えるよう促す。また②の使用は任意なので、特に使用せずとも作業が容易に進めば問題はないと伝える。もし考え込む時間が長くなりそうな場合には、b.をざっと参照し、適宜参考にしながら記入するように勧める。

学習者とは、次の３点を共有しておくことが推奨される。

・ ｂ.の使用によって、より広い視野で過去を捉え直せるようになるメリットがある点

・ 学習者には、同じ出来事や経験でも、時期や状況により事実の捉え方が異なる可能性がある点

・ライフラインは主観や直観を依拠して生成されるため、固定的なものでない点

全体を通じて、 人生の時間軸という新たな視点から「今ここ」を捉え直すことにより、新たな気づきが得られるよう、受容的な態度と支援的な言葉がけを心がけることが推奨される。

図表１　キーワード記入シート

【資料1】

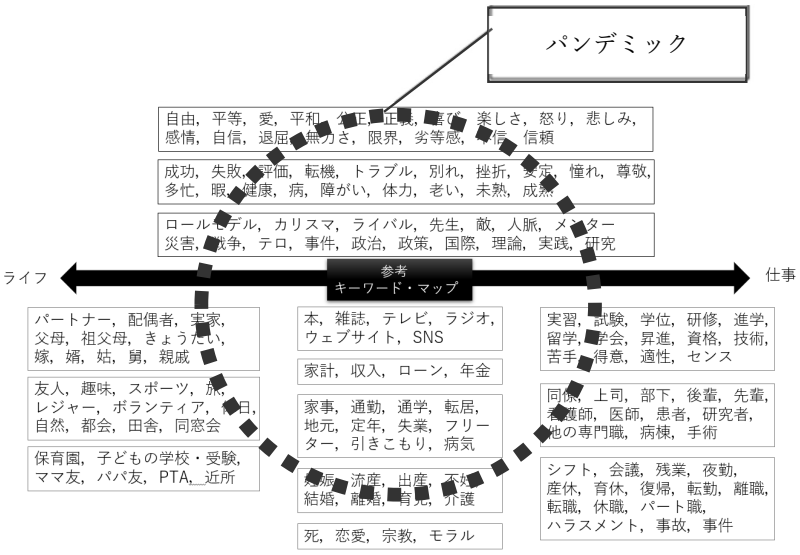
キーワード記入シート

あなたのこれまでのお仕事や生活にとって、大きな転機になった出来事と長期的に影響を与えてきたことをA欄とB欄に記入してください。つづいてあなたのこれからのお仕事や生活にとって、大きな転機になりそうな出来事と長期的に影響をも与えそうなことをC欄とD欄に記入してください。
記入するにあたっては、お手元のキーワードマップを見て参考してくださっても構いません。

	転機となる出来事	影響力の大きいこと
これまで	A	B
これから	C	D

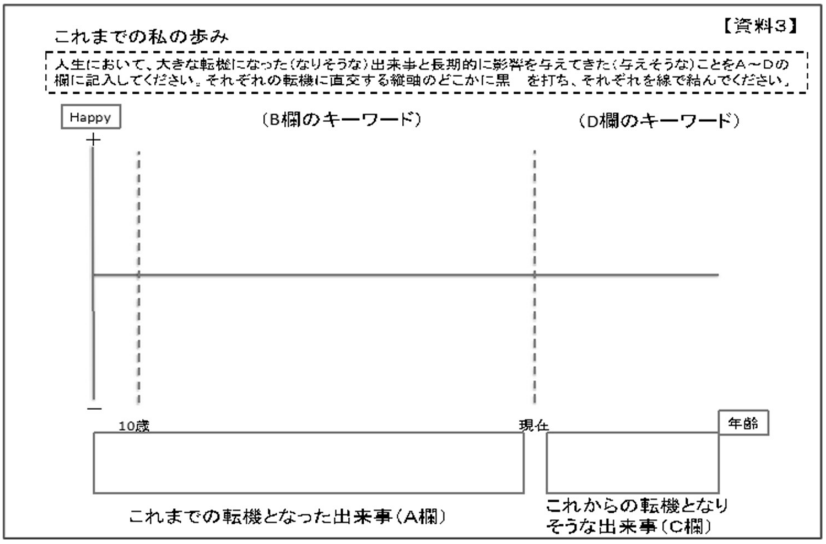
筆者ら作成 © 2017 careerhistory.st.gp.

図表２　キーワード・マップ（パンデミック後）



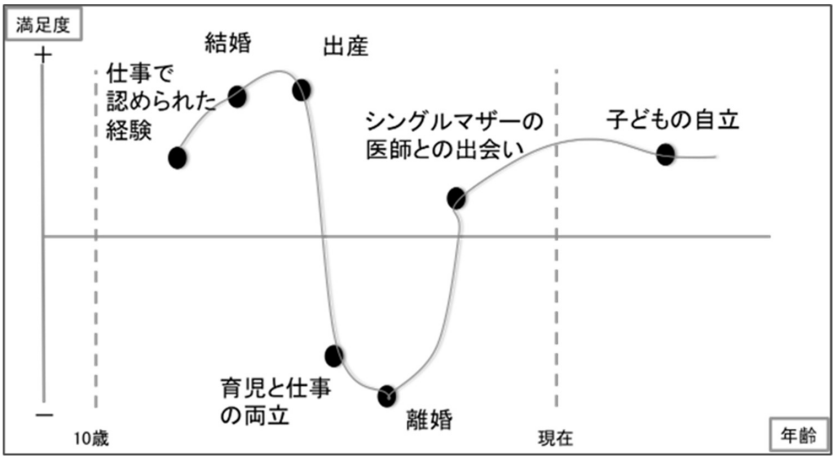
筆者ら作成 ©2022 careerhistory.st.gp.

図表３　ワークシート「これまでの私の歩み」



筆者ら作成 © 2017 careerhistory.st.gp.

図表４　ライフラインチャートの記入例



筆者ら作成 © 2017 careerhistory.st.gp.

図表５　人生を見通す省察ツールとしてのキャリアヒストリーチャートの見取り図

	趣　旨	機　能	省察プロセス	支援者の役割
①キーワード記入シート	・自身の仕事や生活の中で、次に当てはまるキーワード等を記入する。 1)**「これまで」** 「大きな転機となったできごと」と「長期的に影響を与えてきたこと」 2)**「これから」** 「大きな転機になりそうなできごと」「長期的に影響を与えそうなできごと」	・過去と未来について各々、2 点の言語化・文字化を求める。 1)「転機」 ＝ターニングポイント 2)「長期的影響要因」＝キャリア・アンカー	・ワークとライフの「過去」の歩みを「転機」「長期的影響」の 2 つの観点から、整理する。 ・ワークとライフの「未来」に向けた希望や不安、展望等を、「転機」「長期的影響」の観点から、具体的に見通す。 ・以上によって、「現在」の自らの立ち位置が明確化され、「今、目前の」ワークとライフにどう向き合うかを自覚的に捉えることが可能になる。	・学習者が落ち着いて自らのワークとライフの記憶をたどり、跡づけ、適切なキーワードや文言を考えられる時間と空間を確保する。 ・最初は b.のキーワード・マップを用いず、自身で考えるよう促す。 ・考え込む時間が長くなりそうな場合、b.を参照し、適宜参考にしながら記入するよう勧める。
②キーワード・マップ	・ワークとライフを両極に左右に延びるヨコ軸の周辺に、両者に多様な形で関わる広範な人や経験、モノ、イベント、関連諸要素、キャリアに影響を与える社会事象、抽象的概念等のキーワードをカテゴリー別に配置した一覧表。	・マップのキーワード群が、過去の経験や活動を具体的に想起しやすくする。 ・キーワード群が、印象や関係の深いものを選択する能動的行為を引き出す。 ・過去を振り返る行為のハードルを下げる。	・多様なキーワードに触れる中で、「過去」の歩みを具体的な文脈で考えられるようになる。 ・意識外にあったキーワードをも自覚的に視野に入れることで、自らの経験や出来事を社会的文脈の中で捉え直すことができる。	・使用の有無は任意であり、a. の記入が容易ならば問題はないと伝える。 ・とはいえ、b.の使用で左記のように、より広い視野で過去を捉え直せるメリットがある点にも、言及しておく。
③フォーマット「これまでの私の歩み」	・ヨコ軸に左右に延びる人生の時間軸（10 歳と「現在」に点線）、タテ軸にプラス／マイナス方向に向かう Happy 度を据える。 ・A 欄に過去の「転機となる出来事」を列挙し、B 欄に長期的に影響を与える要因を記入する。未来についても同様に記入する（C 欄・D 欄）。 ・各「転機」について Happy 度を示す黒丸を打って線で結んで、「ライフライン」を作成する。 ・記入したフォーマットを見ながら、各々が感じたこと・考えたこと・気づきなどを伝え合い、質疑を交えて共有する。	・過去～現在～未来を「転機となる出来事」を列挙して示すことで、当事者の主観的理解による人生の略年表が生成される。 ・各「転機」の黒丸の地点は、自身の Happy 度の直感的・主観的判定で決定される。 ・黒丸を結んだライフラインは、当事者自身が経験や出来事を内面世界で捉え返した、独自のものとなる。 ・記入後のフォーマットをめぐり、当事者同士、または当事者とファシリテーターの間で自由にやり取りする。	・ライフとキャリアの長期的プロセスを、「転機」を軸として描き出すことで、経時的な変化を視覚的に捉えられる。 ・「長期的影響要因」の抽出により、信念や価値観の根底にある思いやこだわりに気づき、関係する諸要因を探究できる。 イフラインの形状と自身が抱いているイメージを比較検討しながら、変化を俯瞰できる。 ・以上の自己省察、他者とのやり取りから、自らの「現在」の立ち位置*を浮き彫りにできる。 *人生におけるワークの位置づけと意味、信念や価値観、ワークとライフの位置関係や相互関係、葛藤・課題等。 ・未来への期待や不安、展望、決意等も可視化され、自覚的に捉えることができる。	・同じ当事者でも、異なる時期や状況では同じ出来事や経験の捉え方が異なる可能性があることを、共有する。 ・ライフラインは主観や直観を依拠して生成されるため、固定的なものでない点を、共有する。 ・人生の時間軸という新たな視点から「今ここ」を捉え直すことにより、新たな気づきが得られるよう、言葉がけを行う。

筆者ら作成 © 2022 careerhistory.st.gp.

3. 小活 ― 生涯キャリアヒストリー法の実践における省察的学習とは

本稿では、筆者らが開発したキャリアヒストリー法の「生涯キャリアヒストリー法」への名称変更の経緯と背景を跡づけ、「生涯キャリアヒストリー法」における省察と省察的思考の成人教育学的位置づけを検討した後、省察ツールとしての「キャリアヒストリーチャート」を通してどのような省察プロセスが可能になるのかを、学習支援者の役割とともに明らかにしようとした。

最後に、「生涯キャリアヒストリー法」における省察的学習を、Dewey, Mezirow, Schön の議論を踏まえて振り返ってみよう。

「生涯キャリアヒストリー法」における学習者は、「過去を振り返る」「将来を見通す」営みにより、「現在の自分」がどのような「信念」をいかに培ってきたのかを明確化し、その「妥当性」を検討するためのリソースを獲得する。これが Dewey のいう「省察」である。「生涯キャリアヒストリー法」における省察を Mezirow に依拠して捉えると、①内容の省察（「キーワード記入シート」を用いて「これまで」と「これから」の転機や長期的影響に関わる具体的なキーワードを挙げる、など）、②プロセスの省察（Happy 度の高低に関わる判断とそこに長期的に影響を与えた／与えると思われる諸要因の抽出など）、③想定の省察（チャートに記入中の気づきに加え、記入後、他の参加者やファシリテーターと交わす対話など）、の 3 つの省察で構成されることが確認される。他方、Schön に依拠すれば、生涯キャリアヒストリー法における省察は、「行為についての省察」と「行為の中の省察」の両方を含むものと言える。前者は、学習者が自らの「これまで」のキャリア＝ライフを遡ってその「意味を考える」という意味で、後者は、「自らのキャリア＝ライフをめぐる状況との（時間軸を往還しながらの）省察的対話」による探究活動である、という意味である。そこでの省察ツールは、自らのキャリア＝ライフの意味を考えるための手だてでも、省察的対話という探究活動を円滑に始めるための装置でもある。

本稿では、省察ツールに注目しつつ、このようにまとめてきたとはいえ、生涯キャリアヒストリー法という文脈における省察プロセスの探究は、始まったばかりである。筆者たちは今後も実践研究を継続しつつ、このような省察に関わるさらなる研究を継続していく予定である。そこでは、成人教育研究者 Peter Jarvis による人間の学習プロセスに関わる次の見解と照らし合わせつつ、学習者の省察的思考と生涯キャリアヒストリーの関係構図を精緻化していきたい。

> 学習とは、生涯にわたって生じる複数のプロセスが組み合わさったものである。学習において、身体（遺伝的・物理的・生物的）と精神（知識・技術・態度・価値観・感情・意味・信念・感覚）とを包括する総体としての人間（the whole person）が、何らかの社会的状況を経験し、認知的・感情的・実践的に変容する。この変容が、その人個人の歴史(biography）に継続的に統合されていくことで、その人は、以前よりも経験豊かな人間となる（下線部引用者）[33]。

＜謝辞＞本研究は次の JSPS 科学研究費の助成を受けたものです。基盤 B（「女性医療専門職における生涯継続教育の方法論開発―キャリアヒストリー法の構築と活用」（16H03763）、同「女性医療専門職におけるキャリアヒストリー理論の実践的構築および適用に関する研究」（19H01625）、挑戦的萌芽研究（萌芽）「高度専門職養成における領域横断「専門職教育学の教材開発と教育研修プログラム開発」（21K18497）。

[33] ピーター・ジャーヴィス（渡邊・犬塚監訳）『成人教育・生涯学習ハンドブック』 124-125 頁。

＜参考・引用文献一覧＞

池田雅則・池田法子・種村文孝・犬塚典子・柏木睦月・渡邊洋子「キャリアヒストリー法の構築―看護職のためのヒアリングシートの開発」『看護研究』No.4、医学書院、2021、352～367 頁。

犬塚典子「人間を『子どもとしてみる』: 省察的実践を生きる」生田久美子・安村清美編『「子ども人間学」という思想と実践』北樹出版、2020、141-158 頁.

種村文孝・犬塚典子・池田雅則・池田法子・渡邊洋子「ライフラインチャート活用の到達点と課題ー女性医療専門職のキャリア研究方法として」『創生ジャーナル Human and Society』第 2 巻、2019、118～129 頁。

ウィリアム・ブリッジズ『トランジション―人生の転機を活かすために』倉光修訳、パンローリング、2014。

エドガー・H・シャイン『キャリア・アンカーー自分のほんとうの価値を発見しよう』金井壽宏訳、白桃書房、2003 年。

日経 xwoman
「あの人のキャリアヒストリー」2020
https://doors.nikkei.com/atcl/column/19/071600205/091700010/（2022 年 1 月 31 日最終参照）

渡邊洋子「日英における女性医療専門職の比較研究の視点 ： 医師とジェンダー」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 3 号、2015、11～21 頁。

渡邊洋子「専門職のキャリアをめぐる現代的課題―女性医師を手がかりとして」『京都大学生涯教育フィールド研究』第 4 号、2016、3～16 頁。

渡邊洋子「キャリアヒストリー法の構築に向けて一女性医師を対象として」『創生ジャーナル Human and Society』第 1 巻、2018、65～74 頁。

渡邊洋子（代表者・新潟大学）『女性医療専門職における生涯継続教育の方法論開発ーキャリアヒストリー法の構築と活用』、科学研究費補助金研究成果最終報告書、2019。

John Dewey, *How We Think*, C. HEATH CO., PUBLISHERS, 1910（J・デューイ『思考の方法』、植田清次訳、春秋社、1950）。

Peter Jarvis, *Adult Education and Lifelong Learning,* Rougtridge, 2007（ピーター・ジャーヴィス『成人教育・生涯学習ハンドブックー理論と実践』渡邊洋子・犬塚典子監訳、明石書店、2020）。

Jack Mezirow,*Transformative Dimensions of Adult Learning*, Jossey-Bass,1991.（ジャック・メジロー『おとなの学びと変容―変容的学習とは何か』、金澤睦・三輪建二監訳、鳳書房、2012）。

Donald A. Schön, *The Reflective Practitioner : How professional Think in Action,* Basic Books、1983（ドナルド・ショーン『専門家の知恵―反省的実践家は行為しながら考える』佐藤学・秋田喜代美訳、 ゆみる出版、 2001、およびドナルド・A・ショーン『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの 行為と思考』柳沢昌一・三輪建二監訳、鳳書房、2007）

Donald A. Schön, *Educating Reflective Practitioner,* San Francisco, Jossey-Bass, 1987(ドナルド・A・ショーン『省察的実践者の教育―プロフェッショナル・スクールの実践と理論』、鳳書房、2017)。

Donald E, Super, *A life-span,life-space approach to career development*, Journal of Vocational Behavior, Vol.16,Issue3, 1980.